
罌にご用心

ゆきな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罌にご用心

【Nコード】

N9896V

【作者名】

ゆきな

【あらすじ】

薄桜鬼SSL。

放課後、国語科資料室に来てほしい。そんな伝言を受け取った斎藤は、言われたとおりに土方の元へ向かった。だが、入室しようとした時に中から聞こえてきた会話は耳を疑うようなもので、思わず中の様子をつかがってしまう。

「片恋」での設定・会話を一部引き継いでいます。

（「ノベリスト」様にて公開分の再掲 初投稿：2011・07・10）

「一くん、御倉先輩からラブレター……っていうか伝書舎弟が来てたよ。」

沖田にそう告げられたのは、教室の喧騒から逃れ、一人屋上で弁当を食べていた時だった。斎藤は眩しそうな顔で沖田を見上げ、唐揚げを飲みこみ、そしてため息を一つ吐いて傍らのサーモマグに手を伸ばした。

「何用だと？」

「わかってるくせに。あの人、最近ものすごく一くんにご執心だね。」

「……………」

沖田の言葉には答えず、マグに口をつける。冷たいお茶が喉を落ちていく感覚に一瞬眼差しが和らぐが、沖田の次の言葉にすぐ表情を元に戻した。

「今度断ったら、御倉本人が教室に来るってさ。伝えにきた舎弟くんがわざわざ言い残していったよ。」

「それは……迷惑だな。」

「あはは。僕らのクラスに討ち入りしようだなんておもしろい考えだけど、あんな暑苦しいのが押し掛けてくるなんてちょっとね。」

さらりとひどいことを言い捨てて、沖田が目を細めて笑う。自分の顎に指を添えて考え込む斎藤を見つめ、その表情から彼の答えを読みとって首を傾げた。

「付き合っ てあげるんだ？」

「ああ。これ以上放置したところで状況が好転するとも思えん。」

「まあそうだね。……わかった。舎弟くんには僕から伝えておくよ。」

「

頼む。」

斎藤は沖田を見上げて頷いた。太陽を背にするように立つ沖田を見上げるとどうしても目を眇めてしまふのだが、ポーカーフェイスが崩れるその一瞬の変化を見たいがために彼がその場所に立っていることなど、斎藤が知る由もない。今も目を細める沖田が自分の表情に注視していることには気付かず、斎藤は眩しそうに目を瞬かせた。

「それにしても、モテモテだね。一くん。」

「その言い方はやめてくれ。」

嫌そうに顔をしかめる斎藤にもう一度機嫌良く笑うと、沖田はスタスタと来た道を戻り始めた。階段へ続くドアを開け、思い出したように振り返る。

「あ、そうだ。それからさ。」

「まだ何かあるのか。」

弁当箱からつまみ上げた卵焼きを手に斎藤が尋ねると、沖田は軽くうなずいて斎藤の元まで戻って来た。今度はすぐそばにしゃがみこんで視線の高さを合わせる。悪戯好きの猫を想起させる瞳がきゅっと細くなり、斎藤の瞳をおもしろそうにのぞきこむ。

「うん。土方さんがね、夕方国語科資料室に来てほしいってさ。」

唐突に出たその名前に、斎藤の鼓動が跳ね上がる。一瞬詰まった息を吐き出しながら、極力不自然にならないよう沖田を見返した。

「……土方先生が、何故俺を？」

「知らない。僕もここに来る途中で会っただけだからね。五時くらいに来てくれると助かるって言ってたよ。」

「そうか……」

「……やっぱり、気になる？」

「それは……っ?!」

沖田の問いにどう答えようかと迷ったその隙に、彼の手が斎藤の手首を掴んだ。ぐいと引っ張られた左手はそのまま沖田に引き寄せられ――

「いただきます。」

箸でつまんだ卵焼きが沖田の口中に消える。斎藤は目を瞬かせて空

になった箸先を見つめ、小さくため息をついた。むっとしたような雰囲気を漂わせながら横目で沖田を睨みつける。

「欲しいならそう言え。」

「……………言えないよ。言っても手に入らないから、ね。」

数秒の沈黙の後、沖田の目が切なげに細められた。囁くように告げられた言葉は妙に暗い響きを帯びていて、斎藤の目が見開かれる。だが何かを言う前に沖田はすっと立ち上がると斎藤に背を向けた。

「じゃ、伝えたからねー。」

振り向くことなくひらりと手を振ると、今度こそ沖田は扉の向こうに姿を消した。それを見送って、斎藤は一人、膝の上の弁当箱へと視線を落とす。

「卵焼きくらい、いくらでもやるのに。……………そんなに食い意地が張っているように見えるのだろうか？」

沖田が聞いたなら吹き出しながらも内心がつくりと肩を落とすであろうことを呟くと、斎藤は小さく頭を振って昼食を再開した。

* * * *

指定された五時まであと五分、という頃。斎藤は三階の隅にある国語科資料室の前で大きく深呼吸をしていた。

斎藤には教師に呼び出される経験などほとんどない。成績も生活態度も悪くなく、担当教師が土方になった古典はさらにその伸びが著しい。提出物や課題に不備があったとも考えにくい、となると、それ以外の理由——先日 of 体育館裏でのやりとり——があると思えなかった。だからこそ、余計に緊張する。

もう一度息を深く吸って、扉をノックしようと手を上げた、その瞬間。中から、くすくすと笑う聞きなれた声が聞こえてきた。

「やっぱり土方さんって……」

「んだよ？」

（総司、と土方先生か。一体何を？）

思わず聞き耳を立ててしまいそうになったが、斎藤はすぐに頭を振って扉から離れた。このままではまた盗み聞きをしてしまうことになる。先日は出るに出不る状況だったから仕方がなかったが今回は違う。

出直そうと振り返った時、また声が洩れ聞こえた。

「ずいぶんと溜まってたんだね。」

「当たり前だろうが。まったく、何度呼び出しても無視しやがって。我慢にも限界ってモンがあんだよ。」

「だって土方さん、一回が長くてしつこいんだもん。僕の身体がもたないよ。」

「よく言っぜ。まだまだ元気だろ？今日は簡単には帰さねえからな。覚悟しろ。」

（なんだ、これは……）

溜まっているだの、身体がどうだのと、何やら意味深な言葉が飛び出してくる。斎藤は左右を見回すと、後ろめたさを心の奥底に押し込めて再び扉に近づいた。息を殺して聞こえてくる会話に耳をそばだてる。

「別に僕じゃなくてもいいんじゃないですか？適当に呼び出して適当にやらせれば。」

「馬鹿。お前がやらなきゃ意味ねーだろが。」

「あははは。土方さん、それってコクハク？」

楽しそうな沖田の声に、土方のため息が重なる。それは悩ましいほど深く、斎藤は思わず自分の口を手で覆った。本当なら塞ぐべきは口ではなく耳であり、すぐに立ち去ったほうがいいはずなのだが、斎藤の身体は鉛のように動かず、神経は続く声を聞き続けることのみ、集中していた。

「あれ、照れた？……ふふ、せっかちなあ。ココ、もうこんなに膨らんでる。」

からかうような沖田の声。猫のように目を細めて笑う顔が目にかかる。

「誰のせいだ。」

低く唸るような土方の声。無然として目を眇める顔が目浮かぶ。

「僕のせいでしょう？僕のせいで土方さんのココ、こんなになってる。」

「わかってんなら、いい加減舐めるのを止めたらどうだ。」

（舐っ……）

かあつと斎藤の顔に朱が上る。聞こえてくる会話から彼らが何をしているのか、嫌でも想像できてしまった。

脳裏に浮かぶのは淫猥な光景。椅子に腰掛け前を寛げた土方と、その足下に跪いて顔を埋める沖田。揶揄するような言葉を弄する沖田に、土方は無然としながらもどこか優しい視線を向けている。

まるで目の前で起きているかのようににはつきりと思い起こせる光景に、斎藤は目を閉じた。だがからかいの色を含んだ沖田の小さな笑い声は耳から入り込み、浮かんだ映像はなかなか消えることがない。

「舐めてませんよ。触ってるだけです。」

「そういうことじゃねえ。っ、つつくな放せ。」

「ダメですよ。せっかちは嫌われますよ？まあ僕は嫌いじゃないですけど。」

「……無駄口叩いてねえでさっさとやれ。」

「はいはい。」

くすりと笑う声がして、室内が静かになる。だが斎藤にとってはこの沈黙こそが耳に痛かった。濡れた音や吐息がリアルに聞こえてこないことが幸いだと思えるほどに。

沖田は幼い頃から校長の近藤や土方と親交があったという。だから土方が彼に対して他の生徒とは異なる打ち解けた様子を見せても不思議とは思わなかった。だがもし、それだけの関係ではなかったとしたら。今聞こえてきた会話のように親密な間柄だとしたら。

（俺など到底かなうはずもない、か。）

過ごしてきた時間も、お互いの信頼関係も、どれも沖田にはかなわない。何より、土方は斎藤に向かって生徒には手を出せないと言った。にもかかわらず沖田とそういう関係になっているのなら、土方にとって沖田は生徒ではなく、それ以上の存在だということだ。

どこまでも暗く落ち込んでいく斎藤の意識を引き上げたのは、皮肉にもその沖田の声だった。

「はい、今度は土方さんの番ですよ。僕の、見てください。」

「まったく、待たせすぎだ……ってコラ、手をどける。それじゃ何も見えねえだろがっ！」

「何、そんなに見たいの？土方さんのエッチー。」

相変わらず中から洩れる会話は楽しげで、斎藤はどんどん自分が深い沼に身体を絡め捕られるような気がしていた。もしかしたら、この時間に斎藤にここにくるように指示をしたのはわざとこれを聞かせるためだったのかもしれないとさえ思えてくる。

土方は斎藤の気持ちを邪魔に思っていて、こんな形で諦めるように伝えてきているのかもしれない。いや、斎藤の気持ちを察した沖田が、土方は自分のものと主張しようとしているのかもしれない。どこまでも暗く巡る思考にこれ以上は耐えられないと斎藤が立ち去ろうとしたとき、聞こえてきた自分の名に思わず足を止めた。

「それよりさ、こんなとこ一くんに見られたら。土方さんどうする？」

どきりと胸が鳴った。土方がどう答えるのか、再び扉に近づいて耳をそばだてる。

「あ？なんで斎藤なんだよ。別にどうもしねえよ。」

その一言に。斎藤はぐらりと地面が揺れるのを感じた。体中の力が抜け、崩れ落ちるように膝を付く。頭の中が真っ白になり、何も考えられない。怒りも悲しみもない、ただひたすらショックで、それなのに聴覚は今も中の会話を確実に捉えていた。

「本当に？」

「当たり前だ。あいつは関係ねえだろ。」

（なっ！）

土方の素っ気ない言葉に、一気に斎藤の感情が沸騰する。確かに、土方と沖田の関係については斎藤は関係がないし、口出する理由もない。だが、あの体育館裏でのやりとりまで無かったことにされるのは余りに惨めだ。

斎藤はふらりと立ち上がると、息を整え扉へと手を伸ばした。

「ふうん？ いいのかなあそんなこと言って。」

「何なんだ一体。お前、今日変だぞ。」

「土方さんが変にしたんです。もういいですから、早くしてください。」

「いい加減にしてくれっ！！」

ガラララビシャーン、と派手な音を立てて資料室の引き戸を開ける。その中には、肌を露わにし、あられもない格好で抱き合っているこちらを見返す土方と沖田の姿……は、なかった。

「……斎藤？ どうかしたのか？」

机に向かい、赤ペンを手にきょとんどこちらを見返す土方のネクタイはきちんと襟元まで上げられていた。机の陰になって下半身は見えないが、上半身と同じく乱れがないであろうことは容易に伺える。沖田はといえば、少し離れたところにあるパイプ椅子に腰掛け、手を頭の後ろに組んで斎藤を見つめていた。斎藤と目が合うと、シャーペンの先を軽くくわえた口元がにやりと笑みの形に変わっていく。

「え……………え……………」

先程まで聞こえていた淫靡な雰囲気など微塵も感じられない室内の様子に、斎藤は扉の所で仁王立ちしたまま硬直した。そんな斎藤を見つめ、土方は首を傾げながらも立ち上がって部屋に入るように促すと沖田を視線で示した。

「いい、いいよーくん。やっぱりキミが一番。あっはははははっ」

「総司？」

「……総司、まさか……」

まだ意味がわかっていない土方をよそに、斎藤の顔色が徐々に変わっていく。謀られた怒りと羞恥に彩られたその顔を、沖田は楽しそうに、そして土方は不思議そうに見つめている。斎藤は土方のほうを見ないようにして沖田の元へと歩み寄ろうとしたが、彼はそれより早く立ち上がると窓へと駆け寄った。そのまま棧に足をかける。

「土方さんってすごいよね。僕の予想を超えること言ってくれるんだから。」

「やはり貴様、先程のはワザと！」

睨みつける斎藤の目を愉快そうに見返して、沖田が笑う。

「ワザと、何？ーくんが何を勘違いしたのかは知らないけど、やるのは補講の課題、膨らんでたのは土方さんの額の血管、ええと、あとなんだっけ？……ああ、俺を舐めるな、だっけ？」

あれは傑作だったよねえ、と再び爆笑する沖田に、斎藤の顔が限界まで赤くなる。掴みかかろうとする斎藤をかわして、沖田は窓の外へと身体を翻した。国語科資料室は三階に位置しているが、窓のすぐ下には作り付けの庇がある。そこに降りると、沖田は顔だけを室内に向けた。

「これ以上は嫌われちゃいそうだから邪魔者は消えるよ。土方さん、

さっきの会話全部思い出してみて。そうすれば一くんがなんで怒ってるのかわかるからさ。」

「あ？つて、こら待て総司！まだ課題はたっぷり溜まってんだぞ！」

「一くんにあげる。溜まってるぶんやってあげて。あっははははははは！」

「総司っ！！」

意味深に目を細めて笑う沖田に赤い顔のままの斎藤が怒鳴り返す。斎藤は窓から身を乗り出し、走り去る背中を睨みつけると踵を返した。校舎内に戻るところを捕まえようと走り出そうとして。

「ちよつと待て斎藤。」

その腕を、捕まれた。

「ちようどいい。お前に聞きたいことがある。」

普段より少し低めの声に、こんな時だというのにドキリと胸が高鳴る。それを表情に出さないように気を付けながら振り返ると、すぐそばから射抜くような視線を向ける土方と目が合った。

「……3年の御倉に呼び出されたんだってな。」

土方の瞳が細められる。何かを耐えているような表情に違和感を感じながら、斎藤は頷いた。

「よく、ご存知ですね。」

「……付き合うのか。」

「?……ええ、ここに来る前に会―?!」

言い終わらないうちに腕を掴まれ強い力で引き寄せられた。乱暴なその動きに対処できずによるけた身体を抱きとめられると、頬に当たるスーツの胸元から仄かに香る煙草とウツド系オードトワレの香りに思考と動きが停止する。

だがその一瞬を見逃すほど、土方は初心でも朴念仁でもなかった。すかさず顎に指が添えられ上向けられた視界いっぱいには土方の顔が映る。

「……え、……んっ……」

何故、と思う間もなく唇が塞がれた。性急に押し付けられたそこから強引に歯列を割って侵入してくる熱い舌が口内を蹂躪していく。呼吸さえ奪われそうなキスは本能的な恐怖と大きな快感となって斎藤の身体を震わせた。

「ふ、っ……んん……んう………ん、あ、はあ………な、何故……」

微かなリップ音と共に解放された唇が戦慄き、ようやく継いだ言葉はひどく掠れていた。斎藤は土方を見上げようと首を巡らせ、土方は顔を見られまいとするように斎藤の頭を自分の胸に押しつける。背に回された腕は力強く、それでいて縋るような儚さも感じさせる。早鐘のように鳴る心音は斎藤自身のものだ。だが耳元でドクドク

と響く成人男性にしては早い心音を聞くうちに、土方も緊張しているのだとわかって斎藤の心に少しでも冷静さが戻ってくる。

「卒業まで待つとは言ったがな。だからって、それまで他のヤツに預ける気はねえぞ。」

ぼそりと囁かれる声を心の中で反芻し、斎藤は小さく首を傾げた。『卒業まで待つ』それは先日言っていた生徒には手を出さないというアレだろう。だが他のヤツに預けるとするのは一体誰のことだ、と考えて、ふと、その表情を緩めた。

「何か誤解があるようですね。御倉先輩は遅刻減点の取り消しを求めて俺に脅しをかけてきただけです。」

「……………は？」

「もちろん応じられないと何度も伝えたのですが、それから脅迫まがいのことが何度か。ついには教室まで乗り込むとまで言われたので、他のクラスメートの迷惑になる前に片を付けようと直接会ってきたばかりです。……少々、予定外に手荒な事にはなりましたが。」

そう言っただけで眉をしかめる。斎藤が訪ねていった時、御倉はあろうことが取り巻き連中と共に喫煙の真っ最中だった。減点どころか停学レベルの行いに呆れ果てた斎藤に向かって、御倉たちは制裁だ口封じだという意味の分からない理由で力に訴えて来たのだ。

もちろん、斎藤が今無傷でここにいるということは、その勝敗は明らかだ。彼らは今頃、保健室で山南の手厚い看護を受けているだろう。その服にしみ込んだ煙草の臭いについても尋ねられているはずだ。

「そういうことですから、御倉先輩とのお付き合いは清くも正しくもありませんが疚しいものでもありません。ご理解、いただけましたか。」

話を聞き終えて、土方はいつのまにやらぽかんと開いていた口を閉じると斎藤から身体を離れた。数歩下がって机に軽く腰掛け、右手で髪をかき混ぜる。

「んだよそれ。……聞いてねえぞそんな話。」

「それなのですが。」

斎藤がすつと一歩前に出る。切れ長の目がさらに細くなり、探るような表情を見せて土方に詰め寄った。

「土方先生、俺と御倉先輩が会うという話、誰から聞いたのですか。」

「誰って………っ、あの野郎!!」

突如叫んだ土方が振り向いたのは窓の外。その動きは先程そこから出て行った人物を追うもので、予想通りの答えに斎藤は小さくため息をついた。

「やはり、ですか。まあ他にいないとは思っていましたが。」

そう言ってさらに一歩、前へと踏み出す。ぎりど鬼の形相を浮かべる土方の正面へ回ると、じっとその顔を見つめた。

「……………なんだよ。」

「生徒には手を出さない主義だったのでは？」

斎藤の顔に、満面の笑みといってもいいほどの笑顔が浮かぶ。その表情を貼り付けたままで問いかけると、土方の顔がぎくりと固まった。視線を落ち着きなく彷徨わせ、ずっと視線を逸らす。

「出してねえ。」

「そうですか。では先程のアレは一体？」

「あ、あれは……っ、初めてじゃねえんだ、キスぐらいでぐだぐだ言うな。」

「らしくない暴言ですね。」

言われずともわかつているのだろう。土方は気まずそうに視線を泳がせた。その顔がわずかに顔を赤く染まっているのを見上げて、ふ、と斎藤が笑う。むくれたように尖らせた唇に今度は自分から触れると、先程土方がしたのと同じように彼の中へ侵入した。奥に逃げようとする舌を引き出し、絡めて吸い上げる。

「ん……んんっ……あ、ふ……っ、ん……」

土方の声が甘く鼻に抜ける。くぐもったその声を聞きながら、ネクタイの結び目に指をかけた。ゆっくりとそれを緩め、ボタンを上から三つほど外していくと、ピクリと土方の身体が跳ねた。

「あ……さ、いと、……っ？！」

「なんですか。」

抗議の声を上げる土方にしれっと返事を返し、その耳朵に口付け形を唇で辿る。中に舌を差し入れてわざと音を立てると土方が大きく震えていく。

「ふっ……く、あ………んっ……」

「キスくらい、と言ったか。」

ちゅ、と音を立てて耳の下に口付ける。そのまま舌を這わせて、喉元、鎖骨へと滑らせていくと、きつく吸い上げた。

「お、おい?!」

覚えがあるのだろう軽い痛みにも声を上げる土方を見上げ、斎藤はつけたばかりの赤い痕に舌を這わせると暗い笑みを浮かべた。

「キスくらい、あんたは他の生徒にもしているのか。手を出したことはならないのなら、キスくらいは……」

「ばっ、するわけねえだろ! って、よせ! そこは……ダメだ……」

指先で首筋を辿り、今度は少し高い位置に唇を寄せる。焦ったように叫ぶ土方の声は、斎藤が赤く色づいた痕から唇を離すと弱々しく消え、斎藤は彼の耳元に息を吹きかけるようにくすりと笑った。

「問題ない。ネクタイをきちんと締めておけば、外からは見えん。」

「そっいう、ん……っ……」

困惑したように小声で返す土方にもう一度口付けてその舌を舐ると、斎藤はするりと身体を離れた。身体を中心に集まりかけている熱には気付かないフリをして、表面上は真面目な顔を取り繕うと、何もなかったかのように首を傾げる。

「放課後に用がある、と呼びだされて来たのですが、ご用件はなんでしょう。」

「……俺は呼び出してねえ。」

赤い顔のまま無然と答える土方は、斎藤の方は見ずにネクタイを締め直していた。何度も襟の位置を確認しているのは、先ほどの痕が外から見えないかと心配しているせいだろうと思いながら、斎藤は小さく頷いた。

「やはり最初から総司に誑られていたようですね。……では俺は帰ります。」

失礼します、と優等生の仮面を被った声と表情で儀礼的な挨拶をして踵を返し、廊下に出る。そうしてから室内を振り返った。

「土方先生。」

「……んだよ。」

「煙草、少し控えてください。……苦いキスはあまり好きではありません。」

自分の唇を軽く撫で、斎藤はふわりと微笑んだ。一瞬にして赤み

を増した土方が目を見開き、片手で口元を押さえる様を見つめると、斎藤は再び表情を元に戻して静かに頭を下げ、国語資料室を後にした。

扉を閉めた後、思い出したように斎藤の顔が熱く火照ったのは言うまでもない。

* * * *

それから数日後の職員室――

「なあ、土方さん？」

恐る恐る原田が声をかけたのは、パソコンに向かって打鍵音高くキーボードを叩いている土方だ。画面に出ているのは小テストだろうか。義経記の一節が抜粋されていて数力所に線が引かれている。

ノートパソコンの周りは綺麗に片付けられていて、そばにあるのはマグカップとお徳用粒ガムのボトルのみ。彼がいつも手にしているものはそこにはなかった。それがいつもにも増して不機嫌そうな様子の原因なのだろうと、周りの教師たちは皆察していたが、なぜ、彼が急にそれを手にしなくなったのか、知っている者はいなかった。周囲から向けられる遠慮がちな視線に気付いているのかいないのか、土方は不機嫌さを隠そうともしない顔で原田を見上げた。

「ああ？」

「なんでいきなり煙草やめて、ガム噛んでるのか聞いてもいいか？」

「……………」

原田の視線が、デスクの上の粒ガムボトルに向けられる。つい先日まで、土方のデスクにあったのは煙草のストックと灰皿だった。それが綺麗に片づけられ、代わりに鎮座したのが清涼感漂う色合いのそのボトルだ。

土方は苦虫を噛み潰したような顔で小さなボトルを掴むとデスクの引き出しに放り込み、殺戮兵器並の視線で原田を睨みつけた。その視線をまともにくらって、原田はあわてて両手を振った。

「あー、今のなし、忘れてくれ。やっぱり健康のためにも控えたほうがいいー」

言いかけた言葉は最後まで発せられることはなかった。隣に立った緑のジャージ姿の大男が、原田の肩に手をかけると同じく土方を覗き込んだのだ。

「お？なんだなんだ土方さん。女でもできたのか？煙草臭い人はイヤ、とか言われちゃったのか？だーっはっはっはふごうあっ！」

「……………ちっ」

豪快な笑い声は鈍い音と悲鳴に消え、沈黙は舌打ちに変わる。

土方は勢いよくノートパソコンを閉じると立ち上がり、慌てて視線を逸らす他の教師たちには目もくれずに歩きだした。何も言わずに職員室を出ていくその背中を見送ってから、原田は詰めていた息

を吐き出して足元に転がったまま動かない永倉を見下ろした。

「新八、さわらぬ神に祟りなしって言葉、知ってるか？」

（煙草を止めるくらい本氣つてことか。あの人をそこまで惚れさせるなんてどんだけイイ女なんだか。……なあ、斎藤？）

にやりと口端を上げる原田の瞳には状況を楽しむような光が宿っている。実は先日、原田は国語科資料室から出てきた斎藤とすれ違ったばかりなのだ。片手で口元を覆い、真っ赤な顔をして走り去った斎藤の艶っぽさは原田でさえ目を奪われるほどで、バカがつくほど真面目なあの二人が一体何をしていたんだと、らしくもなく下世話な勘繰りをしようとする自分を諷めるのに必死だった。

「土方さんも人の子だったんだな。……ほら新八、いい加減起きろよ。」

原田はぴくりとも動かない永倉の脇腹をつま先でつついてから自分の席へと戻り始め、不器用な恋しかできなそうな二人に向けて、心からのエールを贈ったのだった。

（後書き）

+++あとかき+++

懲りずにSSL設定をお借りしました。

Twitterでいただいたお題「二人きりの特別補講」から、「赤点補講の沖田さんと土方先生の楽しそうな声が国語科資料室から聞こえてきて斎藤さんが妬く」へ発展させ、さらに「斎藤さんが他の男と付き合うらしいというデマを吹き込まれて土方先生が妬く」を追加し、「でも実はせーんぶ沖田さんの罠でした」にしてみました。

……別々にすれば2話書けたんじゃないかと、今になって思ったけどもう遅い。orz

御倉先輩は、長州の間者として斎藤一に処断された御倉伊勢武から名前をお借りしました。SSLですから死んではいませんが、山南さんの赤い栄養ドリンクの餌食にはなったかもしれません（笑）

しかし原田さんが別人だ。個人的に、千鶴ちゃんの相手役としては一番しっくりくる原田さんですが、私の引き出しにはないタイプです。

でも、不器用な土方さんと斎藤さんにエールを送りながら、自分も周りにも薫くんにもバレず器用に千鶴ちゃんとデキてたらいと思う。んで、生徒との恋愛について土方さんと語りあうんだ！

そんな感じの裏設定も含みつつ。

お読みいただき、ありがとうございました。

(「ノベリスト」様にて公開分の再掲 初投稿：2011・07・
10)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896v/>

畏にご用心

2011年10月9日10時27分発行